華子　さようなら
ビイ　こんにちは
華子　さようなら
ビイ　こんにちは
華子　さようなら
ビイ　こんにちは
華子　……さようなら、ビイ
ビイ　こんにちは、シロツメクサ
華子　私が初めてビイに会ったのは、まだ暑い夏の日でした。街はじりじり焦げ付いて、蜃気楼にビルが揺らめく、夏の日。

華子　すみません
ビイ　こんにちは
華子　あの、花束が欲しいんです。
ビイ　シロツメクサ！
華子　はい？
ビイ　シロツメクサ…シロツメクサ…
華子　あの…
店長　あ、すいません。いらっしゃいませ、何になさいますか？
華子　花束を。綺麗系で、家に飾れるようなものを下さい
店長　かしこまりました、そこでおかけになっててくださいね
華子　はい
ビイ　シロツメクサ…シロツメクサ…
店長　ビイ、シロツメクサはお店には置いてない。
ビイ　シロツメクサ、置いてない…

店長　ごめんな。なあビイ、これを見てごらん。
ビイ　…カサブランカ、赤バラ、カーネーション！
店長　よし、じゃあそれで花束を作ってくれ
ビイ　カサブランカ、赤バラ、カーネーション、
華子　あの、今のって？
店長　え？ああ、これですよ。
華子　これ、今売れっ子のアイドルの写真？
店長　これ見せると、あいつが綺麗系の花束を見つくろってくれるんです。
華子　え？
店長　あいつの見立ては確かですよ。すぐ出来ますんで、ちょっと待っててくださいね。
華子　えっと、あの人はいったい…
店長　はは、不思議でしょう、うちに初めて来た人は皆びっくりするんですよ
華子　すいません
店長　いえいえ。あいつはビイって言います。人を見ると、花に例えるのがあいつの癖っていうか、本能みたいなものなのかな。俺はあいつが誰を見てどんな花にするのか覚えて、お客さんの要望の時にその写真を出す、簡単なもんです。
華子　へえ…でもそのアイドルの人、綺麗系な花の人なんですか？ギャルっていうか、私あんまり好きじゃないから…
店長　あいつがそう見立てたなら、そういう人間ってことです
華子　そういうもの、なのかしら。
ビイ　できた
華子　っ！うわあ、すごい、綺麗…！
店長　ありがとう、ビイ。とっても綺麗だね

ビイ　みんな綺麗だよ、花はいつも綺麗
店長　お待たせしました、お代はこちらで。…お客さん？
華子　あ、すみません。…あんまり綺麗で、驚いて。
店長　ははは、気に入って頂けて良かった。はい、ちょうどお預かりで。
華子　ありがとうございました。本当、綺麗。あの、ありがとうございます、ビイさん。
ビイ　シロツメクサ！
華子　え？
ビイ　シロツメクサ…シロツメクサ…
店長　あ、気にしなくていいですよ。毎度どうも。
華子　はい…失礼します。
華子　家に帰るまで、私はずっと、わくわくしていたのを覚えています。いつもは丸まった猫背がしゃんとして、道行く人皆に自慢したい思いがしました。家に帰って花瓶に活けると、花が照らすように家が明るくなりました。その日にテレビに映ったあのアイドルを、私は少し好きになりました。

華子　こんにちは
ビイ　こんにちは
華子　花束ください
ビイ　シロツメクサ！
華子　ふふ、はい、シロツメクサです
店長　いらっしゃい、すいませんねいつも。
華子　いえいえ
ビイ　シロツメクサ…シロツメクサ…
店長　ビイ、シロツメクサはないんだ、ごめんな

ビイ　シロツメクサ…ない…
華子　ビイさん、今日はこの人の花束を作って下さい
ビイ　…チョコレートコスモス、セロシア
華子　じゃあそれでお願いします
ビイ　チョコレートコスモス、セロシア
店長　華子さん、ずいぶんビイの扱いに慣れてきましたね
華子　そうですかね
店長　そうですよ、っていっても毎日シロツメクサー！って言われてればそりゃ慣れるか
華子　本当、どうしてシロツメクサなのかしら。シロツメクサってあれでしょう？よく野原に生えてる雑草の。
店長　たしかによく生えてる。でもあれですよ、四つ葉のクローバーなんてシロツメクサの葉ですからね。
華子　あれもひどい話ですよね、踏まれて奇形になったから四つ葉、って。
店長　生まれつき四つ葉ってのもいるんですけどね。小さい頃探しませんでしたか？クローバー
華子　実家は田舎でしたから、そこらじゅうシロツメクサだらけですよ。探す気にもならないです。
店長　そうなんですか。いいなあ田舎、こう都会にずっといるとそう言う田園的風景が懐かしくなる。
華子　つまらないですよ、田舎なんて。なんにもないもの。
店長　実家に帰らないんですか
華子　…実家には、帰らないです。あまり仲も良くないし、今はこっちに家庭もありますから
店長　ええ、結婚してたの！

華子　どうしてそんなに驚くんですか
店長　だってこう毎日毎日花束買っていくからさ。いまごろお宅花まみれだろ？よっぽど一人暮らしが寂しいんだと思った。じゃあ旦那さんが花好きなんだね。
華子　…まあ
ビイ　できた
店長　ありがとうビイ。
華子　綺麗…本当、すごく綺麗…
ビイ　チョコレートコスモスは匂いがする
華子　え？これ、チョコレートコスモスっていうんですか？
ビイ　チョコレートの香りがするよ。
華子　ほんとだ、チョコの香り
店長　いいですね、華子さん何の写真見せたんですか？チョコレートコスモスはあんまり仕入れないんですよ、繊細で、枯れやすいし。それに、
華子　それに？
店長　こいつがあんまり選ばないんだ。バレンタインの時なんかは注文が多いから俺もビイに見せる写真が無くて困る。良かったらその写真、見せてもらえませんか
華子　だめ！
店長　…あの、
華子　…ごめんなさい、でもこれは、勘弁して下さい
店長　すいません、お客さんに失礼でしたね。謝ります
華子　そんな、そんなことないです…私こそ…すいません…
ビイ　シロツメクサー！
華子　わあ！

店長　あ、お代そこに置いといて下さい。気にしないで
華子　すいません、すいません、
ビイ　シロツメクサが、シロツメクサが、
華子　家に帰ると、電気がポッツリ点いているのが見えました。手に持っている花が、ずんと枯れた気がしました。チョコレートコスモスは本当に繊細なのです。それでも早く帰らなくてはいけなかったのでした。あの、花の一本もない、私の家に。

店長　ビイ、今日はこないね、あの人
ビイ　赤バラが笑ってる、栄養剤変えてよかった
店長　なあビイ。あのシロツメクサの人だよ。毎日来てたシロツメクサだ。
ビイ　シロツメクサ？シロツメクサが無い、シロツメクサはどこかな？
店長　ついに旦那に怒られたかな、あんなに花ばっかり買っちゃな。いくらお前の花束でも限度が、っておいビイ！どこ行くんだよ！
ビイ　…シロツメクサを探さなきゃ
店長　いや、こんな都会じゃシロツメクサなんか生えないんだよ。おい、待てって。待てったら！ビイ！
華子　ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…
ビイ　シロツメクサ
華子　っ、どうして…！
店長　ビイ、待てって…、は？ちょっと、華子さん？あんた、何して…
華子　なんでも…なにも…
店長　なにもじゃねえよ、なんで花束地面に叩きつけられてんだよ…これ昨日うちで買ったやつだろ、なにしてんだよ！！
華子　違う、違うの、

店長　何が違うんだよ！ふざけんな、あんたうちの花束いつも叩きつぶしてたのかよ…何考えてんだよ、どういうつもりだよ！

華子　す、みません…すみません…すみません…ごめんなさい…！

店長　ビイが作った花束なんだぞ、ビイがあんたのために作った、あんなに綺麗に作ってやったろ！あんたそれ見て綺麗って言ってたじゃんか、おい！なんとか言え！

華子　……ほっといてよ

店長　はあ？！

華子　ほっといてって言ってるの！お金を払って買ったのよ、あたしは！あたしが花を飾ろうと叩きつぶそうと、あたしの勝手じゃない。ほっときなさいよ！こんな、こんな、汚い花なんか…！

店長　てめ、

（平手打ちの音）

華子　いたっ…

ビイ　綺麗だよ

店長　お、おい、ビイ？

ビイ　花は綺麗なんだ。いつも、みんな綺麗なんだ

華子　ビイ…

ビイ　…綺麗なんだ、綺麗なんだ、綺麗なんだ、

店長　ビイ、大丈夫だから、落ち着け、な？

ビイ　うわあああああ！！！！！！

華子　あ、ビイさん…！

店長　おい、ビイ、待て！！どこ行く！チッ…おい、悪いんですけどねお客様。もううちの店には来ないでもらえますか。

華子　え、

店長　花は、ビイのすべてだ。なんでビイの花束はあんなに綺麗かあんたに分かるか。それは、あいつが命削って花を売ってるからだ。あんたはあいつの命を踏みにじったんだよ

華子　そんな、私、そんな…

店長　あんたさ、最低だよ。

華子　私は、花があまり好きではありませんでした。昔から、花柄は好きだけど花には興味のない、地味な普通の女の子でした。そんな私が、ビイと出会う前に手にした唯一の花束が、あの人のくれた花束でした。眩しくて、目がくらみそうに眩しくて、今思えばあれは綺麗だったのか、私にはもう思い出せないのです。

私はもう、あの花屋には行きませんでした。すずしい風か吹くようになって、秋が来ました。私は、街を出ることになりました。

華子　…あ、シロツメクサ。…すごい、こんなにたくさん

（歩く音）

華子　この街にこんな野原あったんだ、知らなかったな…

（風の音）

華子　すごい、シロツメクサが、風になびいて揺れてる。きれい…

ビイ　花はいつも綺麗

華子　え？

ビイ　こんにちは

華子　っ！あ、ビイさん…！

ビイ　シロツメクサ！

華子　え…

ビイ　シロツメクサ、シロツメクサ…できた

華子　…これ
ビイ　シロツメクサの花束
華子　…ふふ、花束って。これは、かんむりよ。シロツメクサのかんむり。
ビイ　花束、シロツメクサの花束、これが一番シロツメクサが綺麗になる
華子　ふふっ、もう、ほんと、不思議な人、本当に、本当に…
（華子すすり泣く）
華子　本当に…綺麗な…シロツメクサだわ…
（華子泣く）
ビイ　シロツメクサ、泣いてる？あ、えっと、…これ
華子　ひっく、…なにこれ
ビイ　一日に一回、朝にやる
華子　…ふ、ふふ、あはは！栄養剤！
ビイ　あ、シロツメクサ、笑った、笑った！
華子　あはははは、栄養剤って、ふふ、もう、ありがとう！すごい効くわ、こんなに笑ったのひさしぶり！
ビイ　シロツメクサが笑った、笑った
華子　よし、私も作る！私うまいのよ、シロツメクサのかんむり！
ビイ　花束！
華子　はいはい、花束！見ててよね、えっと…
ビイ　シロツメクサ、シロツメクサ、シロツメクサ、
華子　…ねえビイ。私ね、離婚するの。
（ビイずっとシロツメクサを探す　草の音）
華子　あのね、私の夫が、私を殺しかけたからなの。あの人、本当はとても優しい人なのよ。でも仕事クビになったら、ちょっとストレスで、ね。よくあるでしょ？でもいつもってわけじゃないの、たまにね。

華子　殴られたりしたけど、それだけなの。…それだけなのよ。妻なんだから、夫婦なんだから、それくらい私が受け止めなきゃって、思ってた。でもだめね。私があの人を怒らせたから、あの人、つい殴りすぎちゃっただけなのよ。殺す気なんて少しもなかったと思うの。あれは事故なのよ。

ビイ　…シロツメクサ、泣くの？

華子　私実家に連れて帰らされるの。どうしようビイ、あの人、私がいないとだめなの。あの人、都会に来たばかりの私を助けてくれたの、眩しい世界に連れて行ってくれた。あの人が必要としてくれるのに、どうして私ダメなんだろう。ダメなのよ、私…

ビイ　チョコレートコスモス

華子　え？

ビイ　チョコレートコスモスはチョコレートの香りがする。

華子　…そっか、チョコレートコスモスがあの人の花なんだね。やっぱり。

ビイ　チョコレートコスモスはよわい

華子　弱いの？

ビイ　チョコレートコスモスはよわいけど、きれい

華子　そう…ビイ。私あの花好きだった。でももう嫌いにならなくちゃね。

ビイ　嫌い

華子　分かってるもん、私だって。本当は分かってる。嫌いになるわ、チョコレートコスモスも、あの人も。

ビイ　どうして

華子　どうしてって

ビイ　チョコレートコスモスはよわいけどきれい。でも、それでいい。

華子　それで、いい

ビイ　それでいい。

華子　嫌いに、ならなくてもいいの？
ビイ　…嫌いは、悲しい。花はいつも、みんな綺麗。
華子　そう…。
ビイ　できた。シロツメクサ、ツユクサ
華子　あれ、今度は本当の花束？
ビイ　できたよ
華子　…ねえビイ。これくれる？
ビイ　花束？
華子　お願い、これが私の栄養剤なの
ビイ　栄養剤は朝に一回。
華子　いいの、今欲しいの。ねえビイ。
ビイ　…まいどありがとうございました。
華子　ありがとう。…私、もう行かなきゃ。ビイ、さようなら
ビイ　シロツメクサ？
華子　さようならなの。さようなら
ビイ　こんにちは
華子　さようなら
ビイ　こんにちは
華子　さようなら
ビイ　こんにちは
華子　さようなら…さようならよ、さようならなの！もうこの街には来ない。あなたにも、会わない。
ビイ　こんにちは、こんにちは、こんにちは！！
華子　ビイ…ごめんなさい。貴方の花束、好きだった。ずっと謝りたかった。あのね、内緒の話を教えてあげる。

華子　あの人の唯一嫌いだったところは、ビイの花束を窓から捨てるところだったの。本当よ？

ビイ　シロツメクサ、

華子　ありがとう、さようなら、ビイ

ビイ　こんにちは、シロツメクサ。

（歩く音　華子去る）

店長　華子さん

華子　あ、店長さん。

店長　すいませんでした。

華子　やだ、聞いてたんですか。

店長　俺、あなたにひどいことを言いました。

華子　いいんです。私だってビイさんにひどいことをしました。ボロボロにされるって分かってたのに、どうしてもビイさんの花束が忘れられなくて。それなのにあんなこと言って…お二人には何を言われても仕方ないんです

店長　違いますよ

華子　違う？

店長　ビイの奴、あの日店に帰ってなんて言ったと思います？笑えますよ、栄養剤どこ？って。

華子　栄養剤？

店長　変でしょ？なんでだよって言ったら、悲しそうな顔して言うんですよ。「シロツメクサが泣いちゃった」って。

華子　あ…

店長　あれからずっとあいつ栄養剤持ち歩いてたんです。ずーっと、あなたを待ってた。

華子　ビイが…

店長　だからこの謝罪はあなたとビイに対してです。
華子　そうですか。…ねえ店長さん。私、あのお店大好きよ。
店長　ありがとうございます。
華子　じゃあ、さようなら。
店長　はい、さようなら。

華子　今年も夏が来ます、シロツメクサが咲きます。私はもうあの店に行く事はないでしょう。ただ、いつか手紙を送るつもりです。いつか、四つ葉のクローバーを入れて、ビイへ。さようなら、と。